

米公文書に事実を尋ね

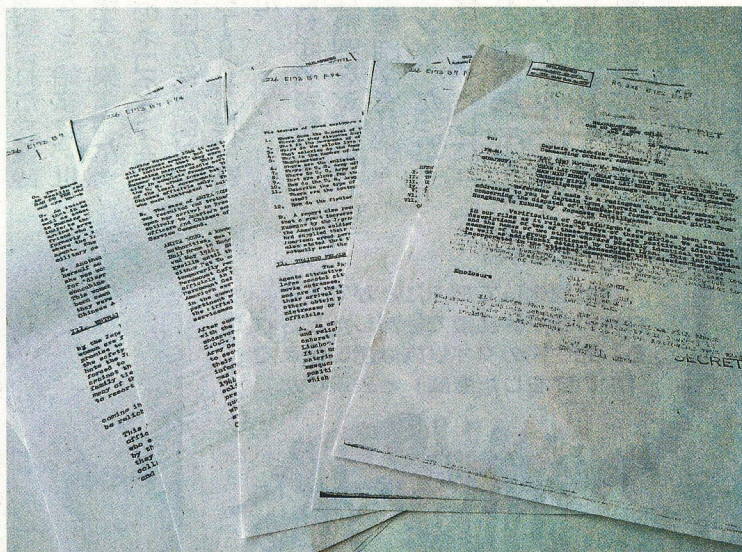
旧日本軍の諜報活動研究

旧日本軍が行った海外での諜報活動を研究する山本武利・早稲田大名誉教授(76)が、中国人女性を使った工作の実態を明らかにするなど精力的な調査を続けている。昨年11月には、近年の主要な論文をまとめた『日本のインテリジェンス工作』(新曜社)も刊行した。

(前田啓介)

山本さんは1997年、米国立公文書館に保管されていた資料の中から、米軍の諜報機関OSS(戦略諜報局)が、44年11月から終戦直前までに作成した報告書を発見した。OSSは中

山本さんが入手した、中国人女性を使った工作について書かれたOSSの報告書



「資料を探す嗅覚があるのかもしれない。今も意欲は衰えていない」と話す山本さん



「日本のインテリジェンス工作」 山本武利さん

約100冊からなる報告書には、スパイを意味する「espionage(エスピオナーシ)」との表記が散見された。諜報対象としては、米軍将兵の数や住居の位置、中国に展開する米軍の各部隊の連絡方法など12項目が挙げられている。

スパイにされたのは女優やダンサーらで、「中国東部で訓練された100人の工作員が昆明に送り込まれ、その大半は女性であった」との記述もあった。

さらに具体的な活動内容にも言及。国民党軍で速記者として働いていたある女性、給食係などから、米軍将校の名前や宿舎の部屋番号などを入手しようとしたと書かれていた。

報告書が作成されたのは、昆明にOSSの本部を構えた米軍が「おひざ元での諜報活動に神経をとがらせていた」こともあるからだという。実は、それ以前に昆明に近い桂林でも、日本軍が女性スパイを使って米軍情報を得ることに成功

していたのだ。ただ、昆明での日本側の工作が成功したかどうか報告書には記載がない。山本さんは「戦争末期、武力で勝利することが難しくなった日本が苦肉の策として取った手法だったのでは」とみている。

一次資料を冷徹に分析

『日本のインテリジェンス工作』に収録された論文の基になった資料は、主に山本さんが国内外の公文書館などで見つけた貴重な一次資料だ。

山本さんは、1990年代後半、米国立公文書館で公開が始まったOSSの資料に接した。メディア史が専門の山本さんは、戦後にGHQ(連合国軍総司令部)が日本で行った検閲を調べていたが、「インテリジェンス工作(諜報・宣伝活動)を知らずに検閲は理解できない」と研究を始めた。

当初は周りから「スパイの研究を始めた」と揶揄されることもあったが、「その時々でわき上がる関心に従い、地道に手あかのついていない資料を探索した」と振り返る。

例えば、戦前の日本の諜報活動を支えた陸軍中野学校については、関連文書が終戦後に焼却され、全貌は不明だった。しかし、山本さんは2011年、国立公文書館アジア歴史資料センター(東京)で、同校の設立理由や授業科目などを示す資料数十点を発見し、実像解明が進んだ。

また、スウェーデン駐在の陸軍武官だった小野寺信が東欧で行った諜報工作について、米軍のSSU(戦略諜報隊)が情報収集能力を高く評価していたことも判明。種々の資料から戦前の日本の諜報工作が、米英などに比べ、著しく劣っていたわけではないことをつかんだ。

山本さんは「先入観でなく冷徹に資料を分析し、事実を導き出すことが大切」と話している。